

# 二学期の抱負と開展

——製作活動ととりくむなかで——

柴 田 い つ

## (一) 一学期の反省

一学期は、その月  
月の幼児の活動を追  
うなかで、幼児の興

味や関心・友だちの  
存在の意識・幼児の

自信や意欲・幼児の  
思考や協力などの發

達的なものが、どの  
ようによれば、どの

ように育つといった  
かについて、素朴な  
場面をとりあげ、幼

児たちの感情の動き  
や活動の変化してい  
くようすを、まわり

の条件とかかわって  
分析していくなが  
ら、幼児を理解しよ  
うとつとめきました。

いかに幼児らしさを發揮させるか、さまざまに展開してくれる

幼児の活動を基礎にしながら、教師自身の指導の姿勢を反省しながら進めてまいりました。一日一日の活動を大切にし、ひとりひとりの幼児が自己を十分表出するための配慮や刺激について、努力してきたといえましょう。

でも、ひとりひとりの幼児らの成長のあらわれとしては、その興味や満足感はちがい、自然と自己表出の姿もちがつけています。自分の気持をコントロールできずに、やりたい意欲をまわりの条件におさまなく押し通してきたK児や、いっこうに自信がない、積極性のなかったM子などのようすを思いだしながら、教師自身の指導のあり方や、一学期は、人間的なふれ合いを大切にして、その中で治療するということを考えきましたことからも、その幼児の発達のプロセスをもう一度つかみ直す必要があると思うのです。

## (二) 二学期の抱負

幼児の成長とともに活動量も広がる二学期は、知的、認識面の  
発達も著しくなるので、幼児の発想を大切にしながら、生活の充  
実をはかり、幼児なりに自己決定した活動の目的に向かう方向づ

けをしてやりたいと思います。そのために教師は、幼児たちの活動をどうとらえ、どうのばしていこうとするのか、幼児の要求や遊びの発展の予想などを洞察し、幼児とともに、保育を創造して、いくための構えをもちたいと思っています。何かを与えようとする教師では、幼児らも受身になつて、幼児たちのもつ可能性の芽を引き出してやれないでしよう。

幼稚園の指導の単位は、一日の充実が強調されますが、それは、明日へつながるものであり、そして、未分化から分化していく過程の、いろいろの矛盾を、幼児らとともに開発していく努力が大切と考えます。

平面から立体へ、単純から複雑へと、この二学期は大きな変化がみられるでしょう。そしてこれらの過程における教師のとりくみなどについて、とくに幼児らの好む、製作活動からみていたいと思うのです。そこで

- ・ 意欲的な製作活動にとりくませるための教師の配慮や全体の教育の場で、ひとりひとりの幼児を生かしていくための指導を大切にし、
- ・ そしてそれぞれの幼児の発達していく過程を十分つかんでいきたいと考えます。

- ・ ひとりひとりの幼児に、自己あるいは全体の目的に向かってまた

て進んでいくなかでの自信と成功感を味わわせてやり、  
・ 相手をみとめ尊重していく態度のめざえを養っていくたいなどです。

しかし、このような抱負を、実現するためにはやはり人間的なふれ合いを大切にしていきながら、生活を充実させていくことがその基礎となると思います。

### (三) 二学期の実践

#### (1) 自分で伸びようとする力の発見

##### — M子と折紙 —

夏休みが終わって九月二日、幼児たちはどの子もひとまわり大きくなつた感じ、M子の動作にもなんとなく明るさがみられました。M子は登園するなりややためらつていたようでしたが、からんから袋をとりだして教師に持ってきてきました。「これなにが入っているの?」と教師は受けとりながら聞いてやりますと、首をかしげて恥ずかしそうなしぐさをしながら、「いろいろ」と答えてくれました。

自分の考えを率直に表現してくれないM子なので、教師もよいチャンスと思ってM子と話合いの場をもとだと思い、「なにが入っているのかな?」と、袋をのぞくと金魚、家、舟、ふうせんな

どの折紙が入っています。「あついいものがあつた、これオルガンね」ととりだしてひくまねをすると、M子はうれしそうに、「おばあちゃんと折つたん」と答えてくれました。

この幼児は、祖母に育てられ、幼児らのあそぶあそびを知りませんし、かゆいところに手がとどくように育てられたので、自分からやろうとする気力が自然なくなってしまっているようでした。これまで、機会をみてはM子の気持を引き立てるための努力はしてきたのですが、なかなかM子の自信は引き出してやれませんでした。この日は、よほど教師にこの折紙を見せたかったのか、自分から出してくれたことは、M子にとっては進歩でした。教師もうれしくなつて折紙を順に机の上におき、それぞれの形に合わせて、うたをうたいながら並べていったのです。

教師の声につられて室内にいた幼児(W、A、H、T)も寄ってきて、「ワン、ワン、ぼくポチですよ」「ワン、ワン、あそびましよう」と犬の折紙に指を入れて、幼児と簡単な会話のやりとりが始まりました。おはなしあそびなどの場を設定するより、自由に幼児の思うまま体全体で動けるので、幼児らの言葉も気やすくとびだすのでしょうか。M子の表情もいかにも嬉しそうでした。この日、時間もなかつたので、小さい整理かごに入れ「明日のあそび」を期待してかえりました。

次の日、同じメンバーのW子たちは登場すると、早速あそびは

じめ、まま」とコーナーの柵のところにしゃがんで、指人形のように動かしています。T子は、M子にも黄色の犬を渡してやりながら仲間にさそっています。

M子はちょっとためらつていたようでしたが、犬を受取り、自分もしやがみだしたので、教師もほつとしました。「おかあちゃん、ママちゃん、おやつちょうだい」「はいはい、いまあげますよ、だけどいちどにきてはいけませんよ、並びなさいね」「はい」と、おかあさん役のA子のリードに、うまく呼吸があつて、会話もはずんできました。M子はなにもしゃべれませんでしたが、A子たちの会話を聞きながら、声にはならなくとも、T子といつしょに動作しているようすは、M子の心が動きだしたようで、ほんとうに楽しそうでした。

そのうち、お客様になる幼児もてきて、数名柵の前にすわってみています。その場のふんいきは、開放的ではありますが、もうすこし、演出している幼児にくふうさせてやりたいと思つてみていますと、犬の折紙がよく手からはずれ、なんかいも拾つているので、割箸をつけるよう助言してやろうと思ったのです。でも会話のやりとりはつづいていますし、幼児ら自身に気付かせてやりたいと思い、教師も白い洋紙で犬をつくり割箸をくつづきました。側へ寄ってきたS子は、「先生それちょうどい」と甘えてきましたが、「Sちゃんもつくってごらん、そこに紙あるから」

と答えてやりますと、あまり根気のないS子でしたが、折り方を教師に聞きながら折り、マジックで目をかき、教師のまねをして耳のところを茶色でぬりつくり上げました。

S子と二人はまま」とコーナーにいき、「わたしたちもいれで」と呼びかけますと、すぐW子たちは、「あつ、わたしたちも奢つけよや、先生奢ちょうだい！」と要求してきました。幼児たちは意欲をみせ、とりくみにかかりました。教師もまた、「大きの体もつくってあげるといいわね」と一言つけ加えてやり、空箱や、アイスクリームのカップなど体の部分にできそうな大きさのものを置いてやりました。「わたし、きーめた」とクリームのカップをとるので、それに連鎖的に反応して、K、Oや他の幼児たちもつくりだしました。適当な大きさを探して体にし、画用紙でしつぽをつけ、リボンもつけている幼児もいました。

M子もK子に手伝つてもらいながらつくりつていましたが、園庭からもどってきたC子が、「わたしも犬つくらせて」と、色紙をもつてきたので教師は、「あ、Mちゃん犬さんの折り方教えてあげてね」とたのむと、「ウン」とうなずいてくれたので、C子はM子の側へいって折つてもらっています。「あ、Mちゃん折るの早いわ」とW子がいようと、まわりの幼児たちもM子をみて感心した表情です。

教師も、「Mちゃんうまいのね」とほめてやりましたが、いま

までなんとかしてこのM子の自信をひきだしてやりたいと努力してきたはずですが、こんな面にM子の興味があるということがわかり、理屈ではわかっているながら、M子を十分理解していないかたとすることを反省しました。つまり、教師は幼稚園の枠のなかだけで考えていたということになるのではないでしようか。どうかすると見逃がしてしまったことのような場面を、今後も大切に育てていきたいと思います。それと同時に、友だちの影響によって変化していく力の大きさもつくづく感じたのです。

## (2) 友だちの関係のなかで育つ意欲

### — A と W の場合 —

十月二十日、S夫のつくったカメラは見事でした。チョコレートの箱の上に、アイスクリームのカップをかぶせ、カップの底と、チョコレートの箱に通じるように穴をあけ、箱の両端に糸をつけて、首にぶら下げました。シャッターも厚紙を丸めて上方につきさしてあります。おもちゃやさんのキヤブテンとしてのS夫は、製作意欲旺盛で朝からとりくんでいました。材料の選択もよく、いい加減の粗雑さがなく、Sのつくった作品は、あそびに使つてもこわれないです。メンバーのA、Wは早速刺激を受けてつくりだしたのですが、形をまねただけでくふうがみられません。

この児童たちは、つくることより、早く首にかけてカメラマン

になりたいという気持の方が大きいようでした。セロテープでかんたんにつけてつくりあげ、中央に穴もあいてません。教師は、もうすこし考えさせてやりたいと思いましたが、いろいろのボーズをしながら友だちを写して満足しているAとWを見て、いまは注文をつけずに、このままにしておいてやることが当然のように思われました。でも教師はなんとか、もつと考えてほしいと思って、S夫のカメラをかしてもらい、「あ、こうしてうつすのね」と感心してAとWの関心をそそりましたが、二人はいっこうに気がついてくれません。

そのうち部屋の隅っこで新幹線を昨日からつくっているF夫のところへいって、二人ともしゃがみこんでいるのです。F夫は、鉛筆の空箱を十個つなぎ、その下に「みぞれのカップ」と、クリームのカップを適当にとりつけていました。でもそのカップ二種類は寸法がちがうため、どうしても平均がどれずにつないだところがはずれるので困っています。

F夫は自分のイメージを実現しようと真剣ですし、AとWも、「ここがはずれるのか」「もつと、よーけセロテープ貼るやわ」「これを上へかさねるやわ」と意見をいい合っています。教師も、「F君、それね、カップの大きさがちがうでしう。みぞれは長いから——」と、話しかけてやると、「そんでもさ、ここ力

一ノなんやもん」とF夫はいうのです。

「そんなら坂にしなあかんやんか」というAの声を聞きながら、教師は、F夫が、目的をもつてこのカップをとりつけたということをがわかり、推測で意見をいつたことを反省しながら、「あ、F君、そうだったの、ごめんね、カーブか、じやどうすればいいかな」と、もう一度問い合わせやりました。「こういうふうにさ、ななめにしたらええわ」とW。「ふーん、ななめね」と教師も首をかしげると、F夫は思いだしたように「あ、わかった!」と手をたたき、いい考えが浮かんだようでした。

そのあと、F夫は「みぞれのカップ」の上をななめに切り落としレールをのせ、安定したので満足しているようすでしたし、AとWも、いつしょになつてよろこんでいます。これらのようすをみていて、AとWにくふうをさせてやりたいと教師はねらいをもつても、教師の方より押しつけては、児童自身のもつ創造性を豊かにすることにはならないのではないかと思われました。

友だちの困っているようすから、自分もいつしょになつて考え、自分の意見がいえたAとWは、作品には粗雑さがあつても、その態度を認めてやりたいと思つたのです。やはり、作品中心に考えず児童の内面にもつ意欲の高まりを、友だち関係のなかで深めていくてやりたいと思います。

### (3) 共通のねらいをもつなかで

#### ——幼児の発想と教師の提案——

十一月二十五日、M夫は「まま」とコーナーにおいてある黄色の傘をさして、鼻うたまじりに部屋を歩いています。教師の顔をちらっとみて、「ぼくチビクロサンボ」と説明してくれ、また歩きだします。その歩き方がこつけいなのでみんな笑いだしてしました。

先週、童話の本を見て、そのあとお話を劇化してあそんでますので、それを再現しているのです。M夫の動作に合わせて教師もはずんでピアノをひいてやりますと、他の児童たちもあそびをつづけながらうたつたり、教師のそばへ集まってきて、元気よくうたいだしました。「チビクロサンボを知ってるかい、小さな坊やを知ってるかい、小さいけれど元気よく、きょうもジャングル歩いてる、ウンバ、ウンバ、ウンバ、ホイ」の最後のホイを高音でひとと、「ウォ」とSのトラがとび出してきました。

M夫は、「キャーこわい！」といつて逃げ回ります。「までまで」と追ってくるトラに、「この傘あげるから食べないでー」と必死にいふのですが、トラのSは「そんなんもんいらんから食べちやう」といいます。あそびの状態で、児童たちはどんどん創作していくすばらしさをもっておりました。教師も、「わー、それは大変！ にげる、にげる」といってやると、M夫は教師にしがみつ

いてきて室内は大騒ぎです。でもどうどうトラにくいつかれてしまいました。

教師は「ストーリーはこうじゃなかつたわね」といつてしまつたら興ざめと思い、「サンボくんは、元気な子でしょう、上手にかくれなきゃ」というと「でもかくれるところがないもん」とM夫は口をとがらせます。「そうね、サンボさんどこへかくれるの？」と教師がきくと、「ジャングル！」とみんな元気よく答えました。「じゃみんなでジャングルつくらない？」と教師はチャンスと思いまちかけますと、児童たちも賛成してくれました。

ジャングルは、どんなところかと児童たちと話合いましたが、インディアンの討ち合いやら羽根の帽子からビーター・パンの話に発展していきました。教師は即興的に話をつづけていくなかで、絵本を出してみながら、深いしげみのジャングルのようすを話し合っていきました。児童たちの意欲的な目の輝きをみて、教師は今後の展開に期待をもちましたが、でもすぐ、製作につながるかどうかは少し不安に思いました。

あくる日、白ボール紙を一枚丸めて部屋の中央に立てておきました。包装紙、黄ボール紙、紙管、画用紙、竹ヒゴ、角材などの材料を準備しておきました。登園してきたC、D、Hは、「あ、木みたい」「ジャングルつくるんやがな」と教師に話しかけましたが、「二個の白ボール紙のあいだをぐるぐる回って走っているだけ

で製作にかかるうとしません。そのうち、O、Kもきて、仲間に入り今度は横に倒して、そのなかをくぐりぬけ、ますます鬼あそびとしての興味の方が強くなっていくようです。

つぎには二個をはなしておき、両方からヨーイドンでくぐりぬけとび出してきてジャンケンがはじまりました。いよいよ教師の意図とは遠ざかっていってしまいます。教師自身は、迷いながらも、このありのままに自分たちを表現している幼児の姿をみつめておりました。そのうちSが登園してきました。

行動的なこのSは、「先生！ もうちょっと短いのない？」とたずねます。「どうするの？」と教師はきくと、「ええもんつくの」といいますが、このSのひらめきも、どうも木ではなくの」です。ちょうどSの背がかかる程度の寸法があつたので与えてやります。早速ホール紙切りをもつてきて、両手の位置に穴をあけ、目の位置にも細長く穴をあけ、頭からかぶり、ロボット人間ができあがりました。

M夫やW、TはSの製作ぶりを興味をもつてみて、自分たちもつくりたい欲望もわいてきたようです。でも思いつきで、どんどん変化していく創造性と同時に、みんなで同じ目的に向かって協力して作業することも、この時期の幼児には大切と考えますし、みんなのやりたい、あそびたいという要求も満足させてやりたいと思いました。しばらくロボットあそびはつづきましたが、

みんなが集まってきたところで、教師は五つのグループに分かれ、木をつくることを提案しましたが、幼児たちも、昨日の話しがあるためか、すぐ賛成し、製作しようという態度を示してくれました。

「ぼくたち、おとうさんの木や」とSがいようと、「わたしたち、お母さんの木やに」と反射的にK子はいいます。一応能力別に序列ができてしまつた感じですが他の幼児らも認めているのか、文句はできません。「ぼくたちお兄さん」とO、「M君とこ赤ちゃんの木になるやわ」とK子がいいます。つねに小さい役割でつまらないのではないかと教師は思うのですが、M夫たちは、それで満足しているようです。五つのグループに分かれ、それぞれ作業をはじめましたが、小枝をとりつけるのにきりこみの入れ方を話しあつたり、椅子にのつて高いところはとりつけたり、包装紙にのりをつけるもの、貼るものなどと、自然と役割もできていきます。

その後の活動については、紙面の都合上省略いたしますが、幼児たちは、互いに影響しあいながら、教師のことばや、幼児の発言のなかで、みんなが共通の目的をもつて作業が続けられました。これらのようすからやはり幼児のあそびを尊重しながら、進めていくことの大切さを知らされました。

#### (四) まとめとして

以上二学期の児童の活動のなかから、遊びの展開を追うので

なく、どのような場面で、どう児童たちはとりくんでいったのか、その変化や、矛盾をどう解決していこうとしたのか日々の実践の

なかから拾っていきました。もちろん製作面からみたいくつかの問題点はあるとしても、それぞれの場面でひとりひとりの児童た

ちは、自分の力を發揮するための努力を、そして教師は、児童たちの伸びていこうとする力の支えや方向づけに努力してきたといえます。でもそれらの教師の配慮や努力は児童の成長を促し、のぞましいものであつたか反省してみると、児童たちが、多くの問題を提示してくれました。すなわち、

- ・ひとりひとりの児童のもつ興味や意欲の変化をどうとらえ、どのように伸ばしてやろうとしたのか、
- ・あそびやしごとを展開していくなかで材料に対する抵抗や発見を大切にし、それをどう育ててやつたか、

- ・児童の発想が教師の意図とどう結びつき、望ましい経験としての発展をどう考え指導してきたのか、

- ・行動力や発言力のつよい児童と、まわりの関係をどう考え援助してやつたか、

などについて、毎日のあそびの場面で示してきた児童ひとりひと

りの行動を、全体の教育のなかで、もう一度考え方をしていきながら三学期を迎えるといいます。

(四日市市立富田幼稚園)

## 児童の教育——原理と研究

津守 真・木原溥子編

本書は「児童の教育」誌に掲載された論文をまとめたもの。児童教育の原理から研究方法、記録、さらに制度上の問題までを、系統立てて編集したもの。最近の児童教育の傾向を知る上にまた概論書としても適切である。

内容——第一章「児童教育の課題」では児童教育全般にかかる問題を扱う。第二章「児童教育の原理と方法」では教育課程、指導計画、子どもを観察する技術などを児童教育の実際につれてよりどころとなる論文を集めめた。第三章「保育の中での研究活動」では、保育研究の基本論、さらに実践記録の具体例をのせてある。第四章「児童教育制度をめぐって」は義務制の問題など制度上の問題を衝く論叢。

執筆者——牛島義友・及川ふみ・恩田 彰・斎藤文雄・坂元彦太郎・清水エミ子・莊司雅子・昇地三郎・鈴木正子・多田鉄雄・津守 真・樋口三紀子・日名子太郎・堀合文子・松村康平・水原泰介・山下俊郎・渡辺桂子他

A5判 四三二ページ 六五〇円

発行 フレーベル館